

教育部省檢定濟

教科書文庫
4
815
42-1937
2000073169

吉田義則著

女子新國文典

初學多用

42351

教科書文庫

4
815
42-1937
2000.0
73169

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

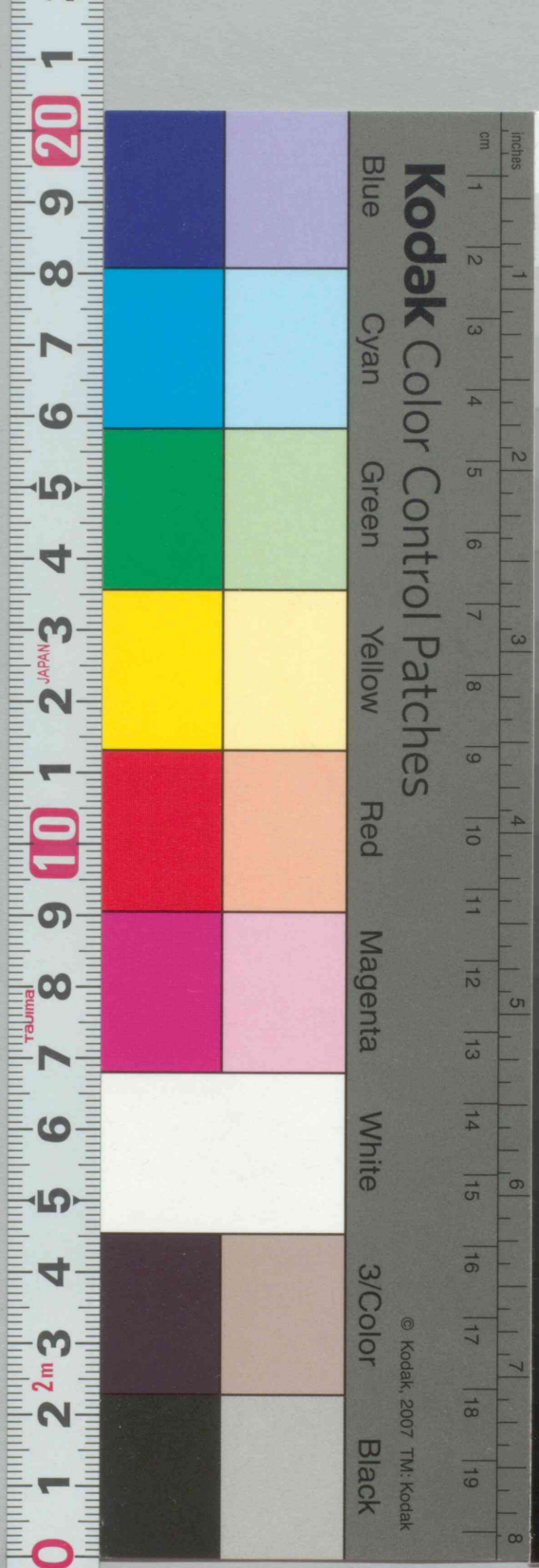
G
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

日三十二月二十年二十和昭
濟定檢省部文
用科語國校學女等高
用科語國校學業實

教科書文庫
4
815
42-1937
2000073169

46
815
AB12

吉澤義則著

女子新國文典

初學多用

広島大学図書
2000073169



第一學年
熊本初技

例 言

一、本書は昭和十二年の改正教授要目に準據し、高等女學校の初學年用の教科書として編纂したものであります。

一、本書は口語法を説明し、語法の知識を確實に習得せしめることを目的としたものであります。同時にまた後學年に説かれる文語法の習得を完全にするための基礎知識を授ける目的をも持つてゐるのであります。それで何かの都合で、教授者が文語に説き及ぼすやうな必要の起る場合の便宜を考へて文語の活用表をも添へておきました。

一、學習者の既得知識、理解程度を考慮し、出来るだけ平易簡明に初學年用として適切な説明をすることを旨としました。

一、語法の知識を確實にしようとするには、出来るだけ練習を多

くすることでありませう。この點から本書は特に意を練習問題に注ぎ問題の數を多くすると共に、新方法を工案しました。なほ初學年用としての立場から材料は大部分小學國語讀本から採り、一は學習者の理解の滑かなやうに、一は學習者の興味を引くやうにと心がけました。

一、敬語は國語に特色あらしめるものであり、國民性と密接な交渉を有つてゐるものであるから、特に注意して説明を加へておきました。

昭和十二年七月

著 者 識

女子新國文典 初學年用 目次

序 說

單 語 篇

第一章 品詞各論(一)……………三

 第一節 名 詞……………三

 第二節 數 詞……………五

 第三節 代 名 詞……………七

 第四節 動 詞……………二

 第五節 形 容 詞……………三

第六節	副詞	六
第七節	接續詞	二〇
第八節	感動詞	三
第九節	助動詞	四
第十節	助詞	七
第十二節	熟語	元

第二章 品詞各論(二)……………三

第一節	用言の活用形	三
第二節	動詞の活用	元
第三節	形容詞の活用	五

文章法篇

第四節	音便	五
第五節	助動詞の種類とその活用	六
第六節	助詞の用法	八

第一章	文の成分	九
第二章	文の成分の位置及びその省略	七
第三章	句と節	一〇〇
第四章	文の種類	一〇四

附表

- 第一表 動詞活用表
- 第二表 形容詞活用表・形容動詞活用表
- 第三表 助動詞活用表
- 第四表 動詞助動詞接續法・助詞と用言との接續法

— 目次終 —

女子新國文典 初學年用

文學博士 吉澤義則 著

序 說

國語には

あたゝかい春となつた。

お母さん、明子様のお家へ遊びに行つてもよろこびますか。

のやうに、人々が日常の談話に使用する言葉と、

那須與一は弓の名人なり。

此の庭のもくせい今年も咲きぬ。

のやうに文章に書く時にだけ用ひられてゐるものがあります。

前のを口語といひ、後のを文語といひます。

口語にも文語にも、それ／＼きまつた言葉の法則があります。

これを文法又は語法といひます。以下主として口語の法則について述べませう。

櫻が咲いた。

私は女學生です。

花は美しい。

右の例はそれ／＼一つのまとまつた考をあらはしてゐます。

これを文といひます。そしてこの文を組立ててゐる言葉の一つ

一つを單語といひ、これをその形や用途や意味の上から次の十種

類に分け、その各を品詞といひます。

- 名詞 數詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞 接續詞 感動詞
- 助動詞 助詞

單語篇

第一章 品詞各論 (一)

第一節 名詞

日が落ちて、西の空は夕ばえが一きは美しい。

宣長は眞淵の志をうけつぎ、遂に古事記の研究を大成した。

物のねだんは、主として需要と供給との關係によつてきます。

右の傍線を施した語はすべて物や事柄の名稱として用ひられてゐます。このやうな語を名詞といひます。

この中、宣長・眞淵・古事記のやうに、そのものに限つて名付けられてゐる語を特に固有名詞といひ、日・西・空・夕ばえ・志・研究物・ねだん・需

要供給關係のやうに同種類のすべてに通じて用ひられる語を普通名詞といひます。

練習問題

- 一、次の文中から名詞を抜き出し、固有名詞があれば示しなさい。
- 一、野末にはすみれたんぼ、きんぼうげが咲き亂れてゐる。
- 二、汽車で大阪驛に近づくと晴れた日でも空がどんより曇つたやうに見えます。
- 三、織田信長の家來には羽柴秀吉といふ名將がゐた。
- 四、乃木大將は、幼少の時體が弱く、其の上臆病であつた。
- 五、南洋は一年中溫度が高く、雨量が多い。
- 六、今から百數十年前、岡山の幸吉といふ表具師が、鳩の體を研究して、大きな翼をこしらへ、それをあやつりながら屋根から飛んで、人々を驚かしたといふ話があります。
- 七、サンフランシスコには、日本人がたくさん住んでゐます。ハワイと同じやうに、日本人の子供たちは、アメリカの小學校と日本語學校と兩方へ通つてゐます。

- 八、青緑紅紫目のさめるやうに美しい魚の群が珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。
- 九、東京から四千籽もあるフィリッピンで、或年の十月の末、子供がつかまへました。すると、其の右足に、日本の文字を記した小さい金屬の板が附いて居ました。
- 二、名詞とはどういふものですか。

第二節 數 詞

木の影を計つたら十二米あつた。
せき一つする者もない。

第一の鳥居から百米の所に二番目の鳥居がある。
角から三軒目が私の家です。

右の傍線を施した語の中、十二米一つは物の數量をあらはしてを

り、第一・二番目・三軒目は順序をあらはしてゐます。このやうな語を數詞といひます。

練習問題

- 一、次の文中から數詞を抜き出しなさい。
- 一、五を八倍すると四十になります。
- 二、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。
- 三、種まきがすんで十幾日、浅い水の上に、二纏か三纏の、若々しい緑の苗が出揃つて行くのは、見るから氣持がよい。
- 四、二十日は立春から數へて、二百十日目に當るのです。
- 五、四回目に兄ウイルバーが乗つた時は非常に調子よく飛んで五十九秒、二百六十米といふ好成绩を収めました。
- 六、二十九日の朝、ロスアンゼルスを汽車で立ち、三日二晩走り續けて、三十一日の夜シカゴに着きました。
- 七、それから七日たつて、波にゆられ、一枚の櫓が海へ流れ着いた。

- 八、大連の埠頭には一年間に汽船が何千艘も出入し、百萬近い人たちが乗り降りします。
- 三、次の□の所に適當な語を入れなさい。
- 書物二□ 墨一□ 封筒一□ 洋服二□ 手紙二□ 大砲五□
- 三、數詞とはどんなものですか。

第三節 代名詞

あなたのお心掛には私も全く感心しました。
それは、すばらしい思ひつきです。
こゝの田にもあそここの田にも田植が始められた。
あちらこちらで鳴子がひびく。
右の傍線を施した語は、すべてそのものがもつてゐる名の代りとして用ひられてゐます。このやうな語を代名詞といひます。

この中、あなた私のやうに人の名の代に用ひられるものを人代名詞といひ、其、それ、こゝ、あそこ、あちら、こちらのやうに事物場所方向を指し示すのに用ひられるものを指示代名詞といひます。その主なものを表にして次に示しませう。

人代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
私 わたし	あなた 君 貴殿 おまへ	あのかた あれ かれ	だれ どなた どのかた
小生 てまへ			
自分			

◇この中「わ」は口語では「我が國」「わが家」等と助詞「が」を添へて用ひるのが普通であります。

◇「てまへ」はあまり上品な語ではなく、「おまへ」は目上の人に對しては用ひてはけません。僕小生君自分貴殿等は、女子は用ひません。人代名詞にはこの外にいろいろありますがこのやうに男女尊卑職業等によつて多少異つてゐますから、日常使用する場合、不適當な用ひ方をしないやうに注意しなければなりません。

指示代名詞

種類	物	事	場所	方向
近稱	これ	こ	ここ	こちら こつち
中稱	それ	そ	そこ	そちら そつち
遠稱	あれ	あ	あそこ あすこ	あちら あつち
不定稱	どれ なに いづれ	ど	どこ	どちら どつち

◇この中「こ」「そ」「あ」「ど」は口語では「この地」「その本」「あの人」「どの箱」といふやうに助詞「の」を添へて用ひるのが普通であります。

今までに述べました名詞・數詞・代名詞を總稱して體言といひます。

練習問題

- 一、次の文中から代名詞を抜き出して、その種類及び稱を示しなさい。
- 一、あなたのお家はどこですか。
- 二、このやうな小さい神様を、私は見たことも聞いたこともありません。あなたは、一體どなたですか。
- 三、月の光にすかして、あちらこちら探しますと、松林の中に石の牢がありました。
- 四、彼は急いで家に歸つた。さうしてその夜はまんじりともせず、机に向かつてかの曲を譜に書き上げた。
- 五、此處は何處だらう。一體わしは今までどうしてゐたのだらう。
- 六、あれが北上川だ。汽車はこゝからあの川について北へと走るのだ。
- 七、あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、こゝまでわざわざ持つては來

二 代名詞とはどんなものですか。

第四節 動詞

南風が吹き、花が咲く。

汽車は野を過ぎ、山を越えて進む。

村の西にくぬぎ林がある。

右の傍線を施した語の中、吹く、咲く、過ぎる、越える、進むは事物の動作をあらはしてをり、あるは存在をあらはしてゐます。このやうな語を動詞といひます。動詞にはそれ／＼定まつた語形の變化があります。これは後に詳しく述べませう。

練習問題

- 一、次の文中から動詞を抜き出しなさい。
- 二、昨日雨が降つたので、今日は六つも芽が出ました。
- 三、客を呼ぶ聲、笑ふ聲、鉢巻しめたバナ、屋の身ぶり、手ぶりもおもしろい。
- 四、山といふものを空中から見下すと、意外にはげた場所の多いのに驚く。
- 五、耕して植ゑて刈つて、干すまで、ほとんど一本／＼手にかけて稲が、此の機械で見ると、片附けられて行く。
- 六、星の動き方をくはしく調べて見ますと、北の空では、星が北極星をほぼ中心に、圓をめぐりて動いてゐるのだといふことがわかります。
- 七、朝早く起きて、井戸端に出る。顔を洗ひ、いつものやうに庭のすみにあるとやの戸を開ける。
- 八、二里程行つて大きな峠へかゝると、上の方から、片はだぬいで、杖を突きながら、かけ下りて来る者がある。

形容詞

- 九、火なほ一本の煙草ぼんのまはりには、人の山が出来て、いろいろの話が出る。笑ひ聲も起る。間もなく「食事のラツバがひびく。
- 二、動詞とはどんなものですか。

第五節 形容詞

にほひのよい、色の美しい、形のかはいらしい花がある。
 涼しい風にくる／＼まはる風車。
 廣い道路が、鐵道と並んで通つてゐる所が多い。
 右の傍線を施した語はそれ／＼事物の性質や状態をあらはしてゐます。このやうな語を形容詞といひます。形容詞にも定まつた語形の變化があり、いひ切つた場合、語の終が口語ではすべて「い」となります。

赤い大きな夕日が遠い／＼地平線の彼方へ落ちて行く。

昨日の運動會は大そう面白かつた。
 右の傍線を施した語も事物の性質や状態をあらはしてゐますが、
 形容詞とは語形の變化に異ひがありますから、これを特に形容動
 詞といひます。

動詞と形容詞を總稱して用言といひます。

練習問題

- 一、次の文中から形容詞を抜き出しなさい。
 一、燕はあの小さい體で長い旅行を續けるせい、途中で死んで歸つて來ないもの
 も、かなり多いといふことです。
- 二、昭和七年の夏、ロスアンゼルスで開かれたオリンピック大會に、日本の選手
 がめざましい活躍をしたことは、今も町の嬉しい話題になつてゐます。
- 三、東の空が明るくなると、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壯大な姿が
 だんぐにあらはれて來る。

- 四、暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねぢが、不意にピンセットにはさ
 まれて、明かるい所へ出された。
- 五、おもりを糸でつるして、それを動かすと、おもりは左右へ振ります。其の糸を短
 くすれば、振方が速く、長くすれば、振方がおそくなります。
- 六、ハワイには支那人も西洋人もゐるが、我々に珍しいのは、色の赤黒い、背の高い土
 人である。體が大きいのに性質がごくおとなしく、しかも音楽が大好きである。
- 七、雲もない空には、月が美しく輝いてゐた。この靜かな夜を、笛の音は高くひくく、
 波をこえてひびいていつた。
- 八、この町で美しいのは、果物屋で見ると、おいしさうな果物が山のやうに積ま
 れてをり、軒並みに日本語が聞かれ、日本人の子供や女の人に會ふことの出來た
 のは嬉しかった。

- 二、右の文中に形容動詞があれば抜き出しなさい。
- 三、形容詞とはどんなものですか。

第六節 副詞

日がかんくくと照つてゐる。
中には小判がどつさりはいつて居た。
此の本はなか／＼面白い。
四月の初ではまだ寒い。

右の傍線を施した語はそれ／＼その下にある用言の意味を限定してゐます。例へばかんくうといふのは「照る」といふ用言に對し、どのやうに照つてゐるのかをはつきりさせてゐます。このやうな語を副詞といひます。

遠い木立や、家や、煙突や、みんななくつきりと夕空に浮出してゐる。

日はぐんぐんと落ちて行く。もう圓の下の端は、地平線にか

副詞

かつた。

右の例のやうに副詞は他の語を隔てて、下にある用言の意味を限定することもあります。

もつとゆつくり歩きなさい。

やゝ暫く考へてゐた。

右の例のもつとやゝのやうにその下にある副詞の意味を限定するものも副詞であります。

練習問題

- 一、次の文中傍線を施した副詞は、どの語を限定してゐるかを示しなさい。
- 二、昨日隣へ引越して来た人の子供ともう仲の好い友達になつた。
- 三、錦の御旗を肩にかけ、相手をにらみつけながら、い／＼と其の場を立去つた義光は、やがて宮に追附き奉つた。
- 三、こゝの田もあそここの田も、掘返した土のかたまりの間には、もうひた／＼と水が

たゝへられて居る。

四、すつかり晴れた夜空に星がきら／＼とさえ、銀河がはつきりと中天にかゝつてゐる。

五、やがて九月もなかばを過ぎると、つばめはそろ／＼日本を去つて行きます。十月には續々と去つて行きます。十一月の初になれば、もうほとんど其の姿を見せなくなつてしまひます。

二、次の文中から副詞を抜き出して、それがどの語を限定してゐるかを示しなさい。

一、滿洲は雨が少く、私がこゝに來てからまだほとんど雨らしい雨は降りません。降つてもすぐからりと晴上つてしまひます。

二、今朝は霜がたくさん下りて、寒い北風がひゆう／＼吹いて居ます。

三、三月といへば春はまだ浅いが、汽車の窓には關東平野がうらかに晴れて居るところどころに梅が咲き、麥の緑があざやかに廣がる。雑木林の梢がぼつと煙つたやうに見えるのも、何となく春らしい眺である。

四、彼は夜もすがら靜坐してひたすら思をこらしてゐると、やがて一點の明星がきらめいて夜はほの／＼と明けそめた。其の刹那彼は迷の雲がかりと晴れてはつきりとまことの道を悟り得た。

五、木蔭の葦島かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐる農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から枯葉のやうな小鳥がついと身を反らして逃げて往つて了ふ。

三、次の文中の□の部分に適當な副詞を入れなさい。

一、今朝は□早く起きたつもりであつたが□太陽はうらうらとのぼつてゐた。

二、春風が□吹くにつれて若草のほひが□身にせまつてくる。

三、お目にかけたいものがあるから、□來ていたゞきたい。

四、あと一月餘りもたつと、□花が咲きます。

五、この極樂の蓮池の下は□地獄の底に當つて居りますから、水晶のやうな

水を透徹して三途の川や針の山の景色が
見えるのでございます。
副詞とはどういふものですか。

第七節 接 續 詞

茄子は煮るか、焼くか、或は漬けて食べます。
大阪は水の都とも、又煙の都とも呼ばれてゐます。
潮がさして來出した。しかしまだ氣がつかぬらしい。
ふしぎに風は止み波は静まつた。さうして尊は、無事に上總の國にお著きになつた。

右の傍線を施した語は、それ／＼その上と下とにある語、又は文をつなぎ合はせる役目をもつてゐます。このやうな語を接續詞といひます。

接續詞

練習問題

- 一、次の文中から接續詞を抜き出しなさい。
 - 一、少ししてから、かの入夫は何氣なしに先程渡し賃を争つた場所へ行つて見た。すると、そこに革の財布が落ちてゐた。
 - 二、「もう内へおはいり。」といふおかあさんのお聲がしたので、みんな内へはいつた。しかし、何だか此のまゝ寝るのが惜しいやうな心持がした。
 - 三、彼は一心に西洋の學問を勉強した。さうして終に當代第一の農學の大家となつた。
 - 四、裁判の目的は決して人を争はせ、又は人を罰することではない。
 - 五、各部にそれ／＼掛の記者、又は技術家がゐて、或は出でて材料を取り、或は社内にゐて編輯事務にたづさはる。
 - 六、今度は程よく食物も取り、休息もした。さうして日夜次々に起つて來る心の迷をしりぞけて唯一筋に道を求めた。
 - 七、父も喜んだ。子供も喜んだ。しかも、一番喜んだのはねぢであつた。

八、此の國歌に歌はれてゐる言葉も、また我が尊い國語に外ならない。
九、苺の澤山とれた時にはジヤムを拵へます。ジエリーも拵へます。又苺酒なども作ります。そして或はパンにつけて賞味し、或は夏時分の飲料に致します。

一〇、言葉といふものは誠にやさしいやうで、それで中々いひにくい場合がある。

二、次の文中の□の部分に適當な接續詞を入れなさい。

一、窓の外にはそよ風が吹いてゐる。□、まぶしい程の日が照りつけてゐる。

二、夜は更けて行く。□、眼がさえて中々眠れない。

三、救ひのボートは下された。□、とても間に合ひさうもない。

四、山へ行きませうか。□、海へ行きませうか。

五、智慧はある。□、學問がない。

三、接續詞とはどういふものですか。

第八節 感動詞

まあ、かはい、ねぢ。

おや、こんな所にあつた。
もし、これはあなたのですか。
いや、私ではありません。

右の傍線を施した語の中で、まあ、おやは感動の心持をあらはし、もし、しは、呼びかけ、いやは應答の語であります。このやうな語を感動詞といひます。

練習問題

一、次の文中から感動詞を抜き出しなさい。

一、まあ、中へはいつて、ゆつくり見て下さい。

二、さて、此の度の舞は日本一の出来であつた。

三、落葉松の林を抜けて小松原にさしかゝると、誰か「やあ、兎兎」と大聲に叫んだ。

四、あゝ、其の事です。決して忘れたものではありません。

五、「おや、これは何だらう。」は、あ、誰かゞ落していつたのだらう。」

六、「いや、二百でなくては買はないよ。」「ようございます。まけて置ませう。」

「や、まけるのか。情ないことをいふ。」「さあ持つて行つて下さい。」

七、「おやく、大變なことになります。」

八、「どれ私もお茶を一つ御ちそうになりませう。」

九、「もし、御陵へ行くのはこの道を行けばよいのですか。」

「はいその道を真直にお進みになればよろしい。」

一〇、「やあ、すつかり變つた。」「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」

三、感動詞とはどういふものですか。

第九節 助動詞

私はかね／＼古事記を研究したいと思つてをります。

兄さんにつれられて港を見學に行く。

夜の更けないうちに、この著物を縫ひあげよう。

助動詞

右の傍線を施した語はそれ／＼その上にある動詞に添うて、その意味を助けてゐます。このやうな語を助動詞といひます。

それは大變面白かつたでせう。

それについては先生は何ともいはれませんでした。

助動詞は右の例のやうに他の助動詞の下に添ふこともあります。

又、

これが一番大切な事である。

今日は土曜日です。

のやうに體言に添ふものもあります。

助動詞にはそれ／＼定まつた語形の變化があります。そしてこ

れだけが單獨に用ひられることはありません。

練習問題

一、次の文中から助動詞を抜き出しなさい。

一、大阪が水の都といはれるわけは川と堀とがあみの目のやうになつてゐるからであります。

二、明かるかつた世界が急にまつ暗になりました。

三、もう人にはたよるまい。自分一人で修業をしよう。

四、軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、これから訓練に取掛るのである。
五、晴れた夜、空を仰ぐと、たくさんの星が、まるで寶石をちりばめたやうに美しく輝いてゐます。

六、龍頭を廻すと今まで死んだやうになつてゐた懐中時計が、忽ち愉快さうにかちかちと音を立て始めた。

七、我々は國語によつて話したり考へたり、物事を學んだりして日本人となるのである。

八、ガラス越しに種々の魚の泳いでゐるのが見られました。

二、助動詞とはどういふものですか。

第十節 助詞

月の光がさし込んでくる。

だれを見ても自分より大きい。

橋の時計は八時に近い。

今日初めてつばめを見たよ。

物を言はないのはわしばかりだ。

右の傍線を施した語はいろ／＼の語句に添うてその意味を補つたり、接續の働きをしたり、他の語句との關係を明かにしたりしてゐます。このやうな語を助詞といひます。

助詞も助動詞と同様に單獨では用ひられません。

練習問題

一、次の文中から助詞を抜き出しなさい。

一、日や月が東から出て西へはいるやうに、星も大體東から出て西へはいるのです。
二、サンフランシスコからロスアンゼルスまでの間は、アメリカ合衆國でも一番景色のよい所だといはれてゐます。

三、模型飛行機が飛ぶのですから、其の大きい物を作りさへすれば、きつと人間も乗つて飛べるに違ひありません。

四、保護色の例はいくちもある。枯木に移れば枯木に似た色になる。

五、今日はお前たちに一つ聞いてみたい事がある。お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか。

六、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第／＼にやみの世界を照らすやうである。

七、軒下から奥を覗くと、煤けた障子が締切つてある。

八、源頼朝が鶴岡の八幡宮へ舞を奉納する事になつて、舞姫を集めました。

九、木の葉が落ちてさびしい庭に、咲きのこる菊の花よ。

一〇、山を越すまで、あれ程うら／＼かに晴れてゐた空が、何時の間にか曇つて來た。

三、助詞とはどういふものですか。

第十一節 熟語

一 熟語

子馬 山野 船歌 たき火 身代り (名詞)

歩き續ける 飛び去る 流し込む (動詞)

奥ゆかしい 有り難い (形容詞)

果して 残らず 思はず 誠に (副詞)

それでも それから ところが (接續詞)

右の例のやうに二つ以上の單語が結びついて、新しい一つの單語をつくることがあります。これを熟語といひます。熟語は同品詞の結びついて出来ることもあり、異つた品詞の結びついて出来ることもあります。かうして出来た新しい熟語もまたそれ／＼

品詞に所屬するのであります。
二 疊語

人々 國々 様々 (名詞)

われ々 だれ々 (代名詞)

重々しい 若々しい (形容詞)

所々 折々 久々で (副詞)

おや々々 まあ々々 さて々々 (感動詞)

右の例のやうに、熟語の中には同じ語の重つて出來たものがあります。これを特に疊語といひます。

三 接頭語・接尾語

お話 御先祖 み位 御兩親様 嬉しさ 眠け (名詞)

第二 五人 十本 三番目 第二等 (數詞)

とり扱ふ うち乗る 上品ぶる 時めく (動詞)

疊語

接頭語

接尾語

け高い うら悲しい ものさびしい 古めかしい (形容詞)
右の例のやうに、それ自身獨立しては用ひられない語が、語調をととのへ、又は或意味を加へるために、語の上又は下に、結びついて熟語をつくることがあります。この中、上に結びつくものを接頭語、下に結びつくものを接尾語といひます。接頭語のつく場合にはその品詞には變りがありませぬが、接尾語のつく場合は、それによつて品詞の所屬が變ることがあります。

練習問題

一、次の文中から熟語を抜き出し、特に疊語・接頭語・接尾語を示しなさい。

一、八幡様のお引合はせか門の戸は細めにあいて居りました。

二、大ていの物は枯れはてて茶色になつてゐる中に梢にすゞなりの柿が赤々と照つてゐる。

三、私たちは其の勇ましい姿を、何時までも見送つて居ました。

- 四、スキー場までは登り道で五軒ばかりある。雪は一米も積つてゐる。
- 五、谷間に沿うて所々に山村があり、温泉場がある。
- 六、大急ぎで、學校道具をかばんにしまひ、めい／＼身輕になつて校舎の後の菜園に集つた。
- 七、宮本の伯父様の所に着いたのは昨夜七時でした。久々で皆様といろ／＼お話をして、非常に愉快でした。
- 八、にいさんのお友達の岡田さんが旅行からお歸りになつた。
- 九、私達は日毎にまた夜毎に秋の來るのを待ちこがれてゐた。
- 一〇、かやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、これに具足一領、長刀一ふり、又あれに馬を一匹つないでもつてをります。
- 二、接頭語・接尾語をもつた熟語を五つづゝ言つてごらん下さい。
- 三、熟語・疊語・接頭語・接尾語とはどういふものですか。

復習問題

次の文を品詞に分解しなさい。

- 一、大阪港は防波堤が遠く續き港内の岸壁には、一萬五千トンの大船が横付けにされます。
- 二、此の間の日曜日、石川君をさそつて學校へ行つた。
- 三、船頭さんが、さを突立ててそれに舟をつなぎました。さうして、其のさをの先に赤いしるしのあるはんてんをしばり付けて、「皆さん、これが目じるしですよ。」と言ひました。
- 四、あゝ、星の本ですか。それなら、天文学といふ見出しのある所を見るのです。
- 五、垣根に咲残つた二、三りんのコスモスの花が夕やみにかすかに浮いて見える。どこかで、たき火のほひがする。やがて、あたりはやみに包まれて行く。
- 六、時計屋さんは、早速ピンセットでねぢをはさみ上げて、大事さうに元のふたガラスの中へ入れた。
- 七、午前八時になると、艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。
- 八、枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畠を、午後の日がかん／＼と照らしてゐる。

九 私達が七つ八つの頃にはそろ／＼秋が更けて來ると晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。

一〇 花も紅葉もない冬枯の時に地上の萬物が銀色に掩はれるのは眞に對照の妙變化の巧を盡したものであるまいか。

第二章 品詞各論 (二)

第一節 用言の活用形

用言はその用ひる場合によつて、語の形に定まつた變化があります。例へば讀むといふ語についてみると、

本を讀ま^へない。

本を讀み^ま初^めす。

本を讀む。

本を讀む^ゝ時^は人^は賢^くなる。
時^は目^が疲^れる。

本を讀め^ば知識^がふえる。

本を讀め。

といふやうに變化します。このやうに語形の變化することを活

用といひ、その變化する部分を語尾變化しない部分を語幹といひます。この用言の活用の形即ち活用形を分類すると次の六種類となります。

一、未然形

前例の「讀まう」といふやうに動作がこれから起らうとする場合や、「讀まない」「讀まぬ」といふやうに打消の場合等に用ひる活用形をいひます。

二、連用形

「讀み初める」「讀みかける」といふやうに主として用言に連る活用形をいひ、すべて「讀みます」といふやうにますにつゞきます。又、この活用形は、

本を讀み、字を書く。

といふやうに途中で言ひさして下に續ける場合にも用ひられ

ます。この場合これを中止形といひます。

三、終止形

「本を讀む」といふやうに主として言ひ切る場合に用ひる活用形をいひます。すべて用言を單獨に言ふ場合はこの形で示します。

四、連體形

「本を讀む人」といふやうに主として體言につゞける場合に用ひる活用形をいひます。

五、假定形

「本を讀めば賢くなる」といふやうに主として假定の意味をあらはす場合に用ひる活用形をいひます。

六、命令形

「本を讀め」といふやうに命令する場合に用ひる活用形をいひ

ます。

以上、六種の活用形を表にすると次のやうになります。

語幹	活用形		未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
	讀	ま	み	む	む	め	め	

練習問題

- 次の文中傍線を施した語を語幹と語尾とに分けなさい。
 - あなたは今朝一人で川を越した方ではありませんか。
 - あちらでもこちらでも驚く聲感心する聲嬉しさうな聲。
 - 國語を尊べ。國語を愛せよ。國語こそは國民の魂の宿る所である。
 - 王は間もなく健康を回復して再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。
 - 日本に春が来ると思へばもう燕は矢もたてもたまらず北をさして進むのです。
- 次の文中傍線を施した動詞の活用形を言ひなさい。
 - 出勤を急ぐ人たちが通る勢よくステツキを振りく、靴音を立ててすれ違ひ

に自動車来る。小僧さんの自轉車が後に續く。電車がごうくと走つて来る。

- 夜の明けぬ中から北の方で銃聲が聞えました。私たち女子の組も先生に連れられて大演習の拜觀に出かけました。
- 私は行はうと思ふことを行ひ盡くし語らうと思つたことを語りつくした。
- 汽車は一瞬を過ぎて間もなく第三第四のトンネルを通過した。
- 敵も見よ、味方も聞け。現れ出た狼を鹿介が討取つた。

第二節 動詞の活用

動詞の活用は五十音圖の同一の行の中で行はれ、すべて前述の六種の活用形をもつてゐます。しかしその活用の爲方には相違があり、口語では次の五種類となつてゐます。

一、四段活用

四段活用

動詞の語尾が次の表に示すやうに五十音圖の「ア・イ・ウ・エ」の四段に互つて活用するものを四段活用といひます。

	居 ^ナ	死	動	讀	語幹/活用形
ア段	ら	な	か	ま ^ナ イ	未然形
イ段	り	に	き	み ^マ ス	連用形
ウ段	る	ぬ	く	む	終止形
	る	ぬ	く	む ^時	連體形
エ段	れ	ね	け	め ^バ	假定形
	れ	ね	け	め	命令形

◇四段活用の連用形にて「て」「た」「だ」たり「だり」などが添ふ場合に

書きて ↓ 書いて

吸ひた ↓ 吸うた

言ひた ↓ 言つた

飛びたり ↓ 飛んだり

などのやうに動詞の語尾の變化することがあります。これを音便といひます。これについては後節で詳しく説明します。

上一段活用

二、上一段活用

動詞の語尾が次の表に示すやうに五十音圖の「イ」段にだけ活用し、これに「る」「れ」「よ」の添はつたものを上一段活用といひます。

	起	語幹/活用形
イ段	み	未然形 き ^ナ イ
	み	連用形 き ^マ ス
	みる	終止形 きる
	みる	連體形 きる ^時
	みれ	假定形 きれ ^バ
	きみる	命令形 きよ ^ヨ

下一段活用

三、下一段活用

動詞の語尾が次の表に示すやうに五十音圖の「エ」段にだけ活用し、これに「る」「れ」「よ」の添はつたものを下一段活用といひます。

カ行變格活用

四、カ行變格活用

動詞の語尾が次の表に示すやうに五十音圖のイ・ウ・オの三段に互つて活用し、ウ段に^レが、オ段に^イの添つたものをカ行變格活用といひます。この活用に屬してゐる語は來るの一語だけであります。

		語幹		活用形
		受	(蹴)	未然形
エ		け	け	連用形
		け	ける	終止形
		ける	ける時	連體形
		ければ	ければ	假定形
段		けるよ	けるよ	命令形

		語幹		活用形
		こ	(來)	未然形
オ段		こ	こ	連用形
		くる	くる	終止形
		くる時	くる時	連體形
		くれば	くれば	假定形
オ段		こい	こい	命令形

◇變格活用に對し前述の四段上一段下一段の活用を正格活用といひます。

五、サ行變格活用

動詞の語尾が次の表に示すやうにイ・ウ・エの三段に活用し、イ段に^レ、ウ段に^レ、エ段に^イの添はつたものをサ行變格活用といひます。

		語幹		活用形
		し	(爲)	未然形
イ		し	し	連用形
		する	する	終止形
		する時	する時	連體形
		すれば	すれば	假定形
イ		しろ	しろ	命令形

この活用に屬する語は、本來この爲^レのだけであり、但し、次の例のやうに、この語が他の語と熟合して、この活用の動詞を作つてをります。

運動する 勉強する 旅する 罪する 損する 講ずる
感ずる 辱くする 正しうする 明かにする 甘んずる
輕んずる

○動詞活用の識別法

口語の動詞が、以上述べた五つの活用の中、何れに屬してゐるかを容易に見分けるには次のやうにすればよろしい。
カ行變格活用の動詞は來^く一語でありますから、直ぐにわかりま
す。サ行變格活用の動詞も爲^するの一語で、これと熟合して出來た
他の語も一見して直ぐにわかります。それで、其の他の四段活用
上一段活用下一段活用の動詞だけを見分けたらよいのですが、そ
れには、その動詞にないといふ助動詞を連續させてみます。この
場合その語尾がア段の音であれば、四段活用で、イ段の音であれば
上一段活用、エ段の音であれば、下一段活用であります。

讀ま……………ない (四段活用)

起き……………ない (上一段活用)

受け……………ない (下一段活用)

動詞の語尾の假名遣

動詞の語尾はすべて五十音圖の同一行中で變化するものであり
ますから、その語尾の假名遣はその活用に注意すれば直ぐにわか
りますが、その中ア行・ハ行・ヤ行・ウ行に活用する動詞だけは紛れ易
いから次にその注意すべきものを示させよう。

ア行に活用するもの

得^える (下一段)

射る 鑄^こる (上一段)

ワ行に活用するもの

植^うゑる 飢^うゑる 据^うゑる (下一段)

居る 率ゐる (上一段)
 ヤ行に活用するもの
 老いる 悔いる 報いる (上一段)

甘える 嘶える 癒える 覺える
 聞える 消える 凍える 越える
 榮える 互える 戯れる 聳える
 絶える 費える 潰れる 痿える
 生える 映える 冷える 殖える
 吠える まみえる 見える
 悶える 燃える 萌える

(下一段)

右の外はすべてハ行に活用するものと思つてよろしい。
 又ザ行とダ行とも紛れ易いが、ザ行の活用は混ぜるの一語だけで、

この外講ずる論ずるのやうにサ行變格活用のもを除いては、すべてダ行に活用するものと思つてよろしい。

練習問題

一、次の動詞の活用を左に示した表欄に従つて活用表をつくりなさい。

行く 押す 過ぎる 尋ねる 流れる ゐる
 來る 言ふ 罪する 恥ぢる 達する 重ねる
 報いる 立つ 顧る

語幹	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形	活用の種類
ナイ					時	バ		
マス								

二、次の文中から動詞を抜き出し、その何活用の何活用形であるかを示し

なれど。

- 一、土が掘返され、くれ打がすむと、田に水がなみくくと張られる。
- 二、今朝早く庭へ出てみますと、昨日出た芽はまだ皮を着けて居ましたが、葉がすと大きくなつてみました。
- 三、夕食をすましてから縁がはへ出る。
- 四、峠の上から、片はだぬいで、杖をつきながら、かけ下りて来る者がある。
- 五、木蔭に見えたり、隠れたりして人が通る。
- 六、波の静かな所で、ふなばたからのぞいて見ると、美しい海底のありさまが手に取るやうに見えます。
- 七、今日は兵隊さんが私の家に泊るといふので、急いで學校から歸つて来ました。すると、もう兵隊さんは来てみました。
- 八、雑草が繁茂し、あたりはすつかり荒れてゐる。
- 九、赤いたすきを掛けた女たちが、よい聲で歌をうたふと、へうきんな五平ぢいさんが、時々へんな掛聲をして、皆を笑はせる。

二〇、我々は、國語によつて話したり、考へたり、物事を學んだりして日本人となるのである。國語こそはまことに我々を育て、我々ををしへてくれる大恩人なのである。

三、次の文中に誤があつたら正しなさい。

- 一、當分使引見込のない、まとまつたお金は定期預金にした方がよいと思ひます。
- 二、若い時はものに感ぢ易いものである。
- 三、雑草が生へ茂つてあたりは荒れはてている。
- 四、よく考へてから書ひた方がよいでせう。
- 五、太平洋から大西洋に通づるパナマ運河は途中でガツン湖という人造湖を横ぎる。
- 六、あの人は山を越へてやつて來たと言う。
- 七、昔の武士はたとへ飢へて死ぬとも二君に仕える事を恥じた。
- 八、眺望臺で眺めると、道を往來している人間や自動車などは、まるで蟻のはうやう

に見^ルゑる。

六、調子のよい蜜柑採歌がすみきつた晩秋の空気をふる村して何處からともなくのどかに聞えて来る。

一〇、互^ニかえる冬の眞夜中の空に、いてついたやうな星がまたたいてゐるのが見へる。

第三節 形容詞の活用

形容詞は事物の性質・状態をあらはす語であつて、定まつた語形の變化があることは既に述べましたが、その變化は

形が良^くない。 色が美^{しく}ない。

形が良^く出來てゐる。 色が美^{しく}なつた。

形が良^い。 色が美^{しい}。

良^い形の壺である。 美しい色です。

形が良^{ければ}買ひます。 色が美^{しければ}目立つ。

といふやうにア行とカ行との二行に互つて活用し、命令形を缺いてゐます。

語幹	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
良	く	く ^{ナイ}	く ^{ナル}	い。	い ^{モノ}	けれ ^バ	〇
美 ^し	く	く	く	い	い	けれ	〇

形容詞の連用形は

今朝は早^く眼がさめました。

のやうに副詞の働をすることがあります。この場合特にこれを

副詞形といひます。又

起きるのは早^く、寝るのは遅^い。

のやうに文を中止する場合のあることは動詞と同様であり、これを中止形といひます。

形容動詞

形容動詞が事物の性質状態をあらはす語であることを既に述べましたが、その口語の活用は、

涼しからう。

静か であらう。 (未然形)

涼しかった。

静か であつた。 (連用形)

静か である。 (終止形)

平然たる態度

静かな場所

(連體形)

静かなら(ば)よい。 (假定形)

右のやうに特殊な活用をし、すべて命令形を缺いてゐます。假定形に連続する場合「静かならば」の「ば」は省略して用ひられることがあり、「平然たる」といふ形も口語ではあまり使用せられません。又この他に

家の中は静かで、外は賑かである。

の静かでのやうに文を中止する場合に用ひる中止形、

たいへん静かになつた。

平然と薬を飲むアレクサンドル大王。

の静かに平然とのやうに副詞の働をする副詞形があります。これを表にすると次のやうになります。

語幹	活用形	未然形	連用形	副詞形	中止形	終止形	連體形	假定形	命令形
静	か	であら でだ せら ッ	○	かつ タ	○	○	○	○	○
平	然		○	と	○	○	○	○	○
涼	し	から ウ	○	○	○	○	○	○	○
静	か	であつ た し つ タ		に	で	である だ す。	な 所 たる 態度	なら (バ)	○

◇「静かです」といふ語は丁寧にいふ場合に用ひられます。

練習問題

一、次の形容詞の活用形を作りなさい。

貧しい 嬉しい 面白い 強い 悲しい 遠い 無い

二、次の文中から形容詞と形容動詞とを抜き出して、その何活用形であるかを示しなさい。

- 一、品物が少くて買ふ人が多い時には品物のねだんは高くなります
- 二、どの子馬も皆かはいらしい顔をしておとなしくつながれておます。

- 三、赤いたすきをかけた女たちがよい聲で歌をうたふ。
- 四、いつの間にか真黒な雲が空一ぱいにひろがりました。
- 五、これはこれはめづらしい大きな桃だ。
- 六、「たひ」は何といつても堂々たる魚です。
- 七、猿はとう／＼、自分が悪かつたとあやまりましたので、かにはおとなしくゆるしてやりました。
- 八、よい工風があります。大きなすゞをねこの首につけておいて、その音が聞えたらにげることにはどうでせう。
- 九、浦島はあまりおもしろい事ばかりなので家へかへるのも忘れて、毎日／＼たのしくくらしておました。
- 一〇、ほがらかな天長節だ。春の日に光る若葉の、しづかな森へ行くと、小鳥のかはい音楽。

- 二、ダイヤモンドは寶石の中でも一番かたくて、光澤の美しい物ですから、誰でもほしがります。

- 三、そんなに風が強くては随分心細かつたでせう。
- 三、自分さへ正しければ、一時は誤解されても、やがて潔白な事がわかるだらう。
- 四、この話をすれば面白からうが長くなるので、この次のよい機会まで延ばさう。
- 五、堂々たる風采をもち、落着いた音聲で、しかも嚴肅に話しはじめたので、場内は水を打つたやうに靜かである。

第四節 音 便

音 便

發音し易いやうに、或音が他の音に轉ずることがあります。これを音便といひます。用言の語尾には、特にかういふ場合が多くあります。

動詞の音便

動詞の連用形から、たたりにつゞく場合に起るので、これに次の四種類があります。

イ音便

一、イ音便 きぎがいに轉ずるもの。

鳥が啼キいていく。

櫻が咲キいた。

水を注ギいだ。

動詞の語尾ぎがイ音便になつた時には下に來るたたりは濁音となります。

イ音便の假名をひゐと書き誤つてはいけません。

二、ウ音便 ひがうにに轉ずるもの。

先生に問ヒうて來ます。

道に沿ヒうた家。

ウ音便の假名をふと書き誤つてはいけません。

副詞の「かく」といふ語も「かう言ふ」といふやうにウ音便になります。

三、撥音便 びみにが撥音んに轉ずるもの。

撥音便

ウ音便

飛行機が飛んで来た。

本を讀んだ。

死んだ後まで名が残る。

撥音便の時には下に連るてたりは濁音となります。

この音便の假名をむねと書き誤つてはいけません。

四、促音便 ひ・ち・りが促音つに轉ずるもの。

戦つて勝つ。

勝つたり負けたりする。

花は散つた。

ハ行四段活用の動詞はウ音便にも促音便にもなります。

この他「行きて」は左のやうに「行つて」と促音便になります。

動物園に行つて来ました。

形容詞の音便

促音便

ウ音便 連用形のくがうに轉ずるもの。

嬉しう存じます。

お早うございます。

この假名もふと書き誤つてはいけません。

練習問題

一、次の文中から用言の音便を抜き出し、その原音を示しなさい。

一、どの鬼もかはるがはる立つてをどつてゐました。

二、或日山で木を切つてゐると雨がざあ／＼降つて来ました。

三、五十鈴川のきれいな水で手を洗ひ口をすすいで御門の前に進んでをがみました。

四、井戸ばたへ行つてよこれた足を洗つた。

五、おおかあさん川へ行つてもようございますか。

六、知らないと言つても證據があつたら仕方がなく。

七、あたりの空氣までが何となくぼうつとして、ふるしき包をしよつたせなかがじつとりと汗ばんで来る。

八、登山者はんじきをはいて、右づきの付いた金剛杖や鳶口を力に、此の坂を登るのです。眞夏の日中でも、杖を握つてゐる手などは何時の間にかつめたくなつてしまひます。

九、朝の霜も忘れたやうに、眞晝の太陽が輝いて、日なたに敷いたむしろの上には猫がぼか／＼と暖かさうに眠つてゐる。

一〇、吹雪を突いて、汽車はたゞ越後平野を北へ北へと進んで行つた。

三、次の文中に誤があつたら正し、その理由を述べなさい。

一、謹むでお祝ひ中上げます。

二、こんな言ひにくひ言葉は無いでせう。

三、道に迷ふて反對の方向に進むてゐた。

四、ありがとふございます。この御恩は死ぬでも忘れません。

五、こうならうとは全く思ひもかけないことであつた。

六、雨がやむだら散歩に行こうと考へてゐる。

七、浮いたり沈んだりして流れていく。

第五節 助動詞の種類とその活用

助動詞も動詞や形容詞と同じやうに活用しますが、それだけが單獨に用ひられることはなくて、必ず用言や體言、又は他の助動詞等に接續して用ひられ、それ／＼の意味を助けてゐます。これをその意味の上から次の十種に分類します。

一、受身の助動詞

友達に笑はれる。
先生に賞められる。

右のれる、られるは他から動作を受ける意をあらはしてゐます。これを受身の助動詞といひます。これは動詞の未然形に接續し、

次のやうに動詞の下一段活用と同様の活用をします。

語活用形		未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
られる	れる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ

この中、れるは四段活用に、られるはその他の活用の動詞に接続します。

これがサ行變格活用の動詞につく場合「噂せられる」「罪せられる」が「噂される」「罪される」といふやうに用ひられることもありま

三、可能の助動詞

一日に十里は歩かれる。

可能の助動詞

この丘から町は一日に見られる。

右のれる、られるはそのものの力ですることが出来る意をあらはしてゐます。これを可能の助動詞といひます。これも動詞の未然形に接続し、受身の助動詞と同様に活用しますが、命令形を缺いてゐます。

三、使役の助動詞

妹に本を讀ませる。

女中に塵を棄てさせる。

右のせる、させるは他のものに或動作を爲させる意をあらはしてゐます。これを使役の助動詞といひます。これは動詞の未然形に接続し、次のやうに動詞の下一段活用と同様の活用をします。

使役の助動詞

語		活用形
させる	せる	未然形
させ	せ	連用形
させる	せる	終止形
させる	せる	連體形
させれ	せれ	假定形
させよ	せよ	命令形

この中、せるは四段活用に、させるはその他の活用の動詞に接続します。

これがサ行變格活用の動詞につく場合、「勉強せさせる」「覺悟せさせる」が「勉強させる」「覺悟させる」といふやうに用ひられることもあります。

四、崇敬の助動詞

おぢい様が旅行から歸られる。

先生も列席せられる。

お歸り遊ばす。
お書き下さる。
お歸りになる。
おいてなさる。

崇敬の助動詞

右のれるられる遊ばす下さるになるなさるは他の動作を敬ふ意をあらはしてゐます。これを**崇敬の助動詞**といひます。この中、れるられるは接續の仕方も、活用も可能の助動詞の場合と同様で、遊ばす下さるになるなさるは動詞の四段活用と略、同様の活用をし、動詞の連用形に接續します。この場合、その動詞はおといふ接頭語を伴ふのが例であります。又、

殿下には展覽會場に臨ませられる。

宮様には毎朝五時に起きさせられる。

のやうにられるの上に更にせさせを添へて一層改つて敬つた言

ひ方をします。

こゝに本があります。

毎日午前八時に登校します。

右のますは丁寧にものをいふ場合に用ひます。これは動詞の連用形に接続し、次のやうに動詞のサ行變格活用と略、同様の活用をします。

語	活用形
ます	未然形
ませ	連用形
まし	終止形
まする	連體形
ますれ	假定形
ませ	命令形

なほ

一寸お伺ひ申します。

御來訪をお待ち致します。

のやうに申す、致す等も、丁寧にものをいふ場合に用ひます。これはともに動詞の四段活用と同様に活用し、動詞の連用形に接続し、この場合その動詞はおといふ接頭語を伴なふのが例であります。

◇崇敬の助動詞の存するのは我が國語のもつ一大特色であり、お互の生活上に於いても大切な意義をもつてゐます。

五、時の助動詞

イ、未來の助動詞

午後には雨が降らう。

明日になれば晴れよう。

右のう、ようは物事がこれから後に起る意をあらはしてゐます。これを未來の助動詞といひます。共に語尾變化なく、動詞の未然形に接続し、うは四段活用の動詞に、ようは其の他の活用の動詞に

ひ方をします。

こゝに本があります。

毎日午前八時に登校します。

右のますは丁寧にものをいふ場合に用ひます。これは動詞の連用形に接続し、次のやうに動詞のサ行變格活用と略、同様の活用をします。

語	活用形
ます	未然形
ませ	連用形
まし	終止形
まする	連體形
ますれ	假定形
ませ	命令形

なほ

一寸お伺ひ申します。

御來訪をお待ち致します。

のやうに申す、致す等も、丁寧にものをいふ場合に用ひます。これはともに動詞の四段活用と同様に活用し、動詞の連用形に接続し、この場合その動詞はおといふ接頭語を伴なふのが例であります。

◇崇敬の助動詞の存するのは我が國語のもつ一大特色であり、お互の生活上に於いても大切な意義をもつてゐます。

五、時の助動詞

イ、未來の助動詞

午後には雨が降らう。

明日になれば晴れよう。

右のう、ようは物事がこれから後に起る意をあらはしてゐます。これを未來の助動詞といひます。共に語尾變化なく、動詞の未然形に接続し、うは四段活用の動詞に、ようは其の他の活用の動詞に

接続します。

但し、サ行變格活用に接続する場合には

早く勉強しよう。

といふやうに勉強しの形に接続します。

口、過去の助動詞

日が暮れた。

日曜日を愉快に過した。

右のたは動作が以前に起つた意をあらはしてゐます。これを過去の助動詞といひます。これは動詞の連用形に接続し、次のやうに活用します。

語	活用形
た	未然形
たら	連用形
たり	終止形
た	連體形
たら	假定形
○	命令形

動詞にこの助動詞が接続する場合に、音便を生ずることは既に述べた所であります。又この語は

出た、出た月が。

庭の櫻が丁度咲いたところです。

のやうにこのまゝ、完了の意をあらはすのにも用ひられますが、

花はもうすつかり散つてしまつた。

その時までには済んでしまはう。

のやうにしまふといふ語に時の助動詞を添へた形でも用ひられます。又、

本が置いてある。

花が咲いてゐる。

勉強をしてゐる。

右のてある・てゐる・てをるは動作の存在又は進行をあらはしてゐます。これも時の助動詞の一態であります。

語	活用形	
てある	未然形	連用形
てゐる	てあら	てあり
てをる	てをら	てをり
	終止形	連體形
	てある	てある
	てゐる	てゐる
	てをる	てをる
	假定形	命令形
	てあれ	〇
	てゐれ	てゐよ
	てをれ	てをれ

この語が動詞に接續する場合にも音便の生ずることがあります。

六、推量の助動詞

明日は雨も霽れるらしい。

どこにもないらしい。

右のらしいは事柄を推量する意をあらはしてゐます。これを推量の助動詞といひます。これは用言の終止形に連り、形容詞に似

た活用をします。

語	活用形	
らしい	未然形	連用形
らしく	らしく	らしく
	終止形	連體形
	らしい	らしい
	假定形	命令形
	〇	〇

今日は面會出来るであらう。

もう歸つて来るだらう。

そろ／＼雪も降るでせう。

今日は到着しよう。

右のやうに未來の助動詞う・ようは推量の助動詞としても用ひられます。この場合は後に説く指定の助動詞であるだ・ですの未然形であらうでせに續くのが普通であります。

七、打消の助動詞

まだ雨は降らぬ。

これはまだ誰も知らない。

そんなこととは知らなかつた。

この花は美しくない。

今日は散歩に行くまい。

右のぬ、ない、なかつ、まいは動作を打消す意をあらはしてゐます。

これを打消の助動詞といひます。まいは特に推量の打消をあらはしてゐます。

ぬは動詞の未然形に、ない(なかつ)は用言の未然形に接続し、(但し、サ行變格活用にはせぬ、しないと接続します)。まいは、四段活用には終止形に、上一段、下一段、カ行變格の各活用には未然形に、サ行變格活用には連用形に接続します。これ等の活用は次のやうであります。

ハ、指定の助動詞

◇この中ぬはんと發音しんとも書きます。

語	活用形		未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ぬ			ず	ず	ぬ	ぬ	ね	○
ない			なく	なく	ない	ない	なけれ	○
(なかつ)			なから	なかつ	○	○	○	○
まい			○	○	まい	○	○	○

日本は神の國である。

富士は日本一の名山だ。

これは私の本です。

これは私の弟でございます。

右のである、だ、です、でござるは事物を指定する意をあらはしてゐます。これを指定の助動詞といひます。これはすべて體言に接

續しますが、

これは私のである。

今、陽は上るのだ。

私も行くのです。

それがあなたのでございます。

のやうに助詞のに連ることがあります。尙前に述べた推量の助動詞うと接續する場合は動詞の連體形に續きます。ですでござるは丁寧な言ひ方であります。

語	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
である		であら	であり	である	である	であれ	○
だ		だら	だつ	だ	○	なら	○
です		でせ	でし	です	○	○	○
でござる	(でござら)	(でござら)	(でござら)	(でござる)	(でござる)	(でござれ)	○

希望の助動詞

九、希望の助動詞

面白い本が讀みたい。

日曜日になると遊びに行きたがる。

庭球がしたかつた。

右のたい・たがる(たかつ)は動作を希望する意をあらはしてゐます。これを希望の助動詞といひます。動詞の連用形に接續し、次のやうに活用します。

語	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
たい		たく	たく	たい	たい	たけれ	○
たがる		たがら	たがり	たがる	たがる	たがれ	○
(たかつ)		たから	たかつ	○	○	○	○

二〇比況の助動詞

風光は繪のやうである。
 明きらかなことは鏡のやうだ。
 まのあたりに見るやうです。

右のやうであるやうだやうですは事物を比較し説明する意味をあらはしてゐます。これを比況の助動詞といひます。用言の連體形又は體言にのを添へて連ります。これはやうに指定の助動詞が結びついた形で、その活用は指定の助動詞と略同様であります。

語	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
やうである	やうであら	やうであり	やうである	○	やうであれ	○	
やうだ	やうだら	やうだつ	やうだ	やうな	やうなら	○	
やうです	やうでせ	やうでし	やうです	○		○	

助動詞相互の接續

又この言ひ方は
 今日 雨も霽れるやうだ。
 今日 雨も霽れるやうだ。
 今年は米のみのりもよいやうです。
 今年は米のみのりもよいやうです。
 のやうに推量の意味をあらはす場合に用ひられることもあります。

助動詞相互の接續

助動詞と動詞其の他の語との接續については、既に詳しく説明しましたが、助動詞相互の接續も、
 霞んで遠くは見え^{助動、體}ない^{助動、用助動、止}のでした。
 のやうに動詞其の他の語と助動詞との接續の場合に準じてよいのであります。

練習問題

- 一、れるられるはどんな種類の助動詞に属してゐますか。その用例をあげて説明しなさい。
- 二、助動詞が動詞及び其の他の語と接續する一覽表を作りなさい。
- 三、口語助動詞を、動詞に似た活用のもと、形容詞・形容動詞に似た活用のもので、特殊な活用をするものとは分類して、表をつくりなさい。
- 四、次の文中から助動詞を抜き出して、その種類と、その何活用形であることを示し、その接續を説明しなさい。
 - 一、これ程勇氣のあるものはあるまじ。
 - 二、自分は何といふ小さい情ない者であらう。
 - 三、あなた方はよく平氣で居られますね。
 - 四、大國主命は大そうお喜びになつて少彦名命をおうちへお連れになりました。
 - 五、水をかけられたら大へんだ。

- 六、あなたのやうなお方に拾はれて、今此の財布をいたゞかせてもらひましたが、いたゞいたのは財布ではなくて私の命でございます。
- 七、何人も其のかしこさと勇ましさに感心しない者はあるまじ。
- 八、あなたの示された不斷の努力がこゝに初めて報いられたのでありませう。
- 九、世の中に親が子を思ふ心ほど深いものはありません。どんな嚴しい親でもどんな悪人でも子を可愛がらぬものはありません。
- 一〇、日本人は日本語によつて教育されなければならぬ。
- 一一、昔から、つばめは同じ家に歸つて來るといはれてゐます。
- 一二、「一體何をあんなに考へてゐるのかなあ。」とひとり言を言つたので、お父さんがお笑ひになりました。
- 一三、蛙は晝間は、働く人や牛にゑんりよをするやうに聲をひそめてゐるが、夕方から夜になると、自分たちの世界だといはんばかりにさわざたてる。
- 一四、貴衆兩院で可決した案を奏上し、天皇が之を裁可せられ、公布せしめられると始めて法律が出來上るのである。

一五 島のすみの日まはりは暑い日を一ばい受けて夏はおれの世界だといふやうな顔をして三つ咲いてゐる。

五 次の文中に誤があつたら正し、その理由を説明しなさい。

- 一、行かふと思へば何時でも行かる。
- 二、やめやうかと思ひましたが矢張まゐりましょう。
- 三、今朝は寒かつたでしよう。
- 四、いくら呼むでも誰も應ぜない。
- 五、そんな無茶なことはすまいと思ふがどうだろう。

第六節 助詞の用法

助詞はその数がたくさんにあります。これをその役目の上から分類し、その主なるものについてその用法を説明しませう。
一、體言などに添うて文章上一定の資格を示すもの。

- が 風が吹く。 (動作の主體を示す)
- の 雪の降る日は寒い。 (同上)
- が 我が國 (體言の修飾を示す)
- の 私の村 (同上)
- へ あちらへやつておきなさい。 (方向を示す)
- が 鼠が臺所ばかりへ出る (場所を示す)
- へ 姉へ手紙を出した。 (相手を示す)
- に 昨夕東京に著きました。 (場所を示す)
- と 國語と英語と數學とを學ぶ。 (列舉を示す)

◇この場合最後の「と」は省いても意義の上に間違ひのない時には省きますが、論語は曾參と有若との門人等が編纂したのやうな場合は最後の「と」を省くと意味が二様にとられますから省略出来ませぬ。

も 本も鉛筆も忘れた。

(並行を示す)

と 水が氷となる。

(指定を示す)

を 庭球をする。

(動作の目的を示す)

から 東京から京都まで約四百軒

(地點を示す)

まで あります。

(終點・限界を示す)

より 金は銀より貴い。

(物の比數を示す)

で 大會は京都で行はれた。

(場所を示す)

飛行機で行く。

(所由を示す)

木で作つてある。

(材料を示す)

病氣で死んだ。

(原因を示す)

以上の助詞は主として體言に添ひます。

の 新しいのがよい。

(體言の代用になる)

◇右ののは活用する語の連體形に連ります。

ニ、主として用言の上にかゝり、その意義を修飾限定するもの。

さへ 今は訪ふ人さへ無くなつた。

(輕いものを擧げて重いものを言外にさとらせる)

でも 私でも出來ます。

(同右)

まで 雨が降るのに風まで吹く。

(更に事柄の加ふことを示す)

こそ 私こそ失禮しました。

(意味を強める)

だけ これだけはしておく。

(分量程度・制限を示す)

ばかり こればかりはお許し下さい。

(同右)

くらゐ 今日くらゐよい日はない。

(同右)

ほど それほどのことはない。

(同右)

など 私などには出來ません。

(例示)

ながら 歩きながら話す。

(動作の併行を示す)

つゝ 考へつゝ讀む。

(同右)

三、活用する語に連つて、接續の働をするもの。

ば 雨が降れば行かない。 (順説の假定の条件を示す)

と 雨が降ると遠足は出来ない。 (同右)

ても 雨が降つても行きます。 (逆説の假定の条件を示す)

ので 風が吹くので、波が立つ。 (順説の確定条件を示す)

から 雨が降るから遠足はない。 (同右)

が 雨が降るが出かける。 (逆説の確定条件を示す)

のに 雨が降るのに陽が射す。 (同右)

けれど 種々検べるけれど不明だ。 (同右)

けれども 訪ねたけれども不在だった。 (同右)

て 話を聞いて知つた。 (動作の接續を示す)

て 急いで歸つた。 (同右)

右の中、ても、では活用する語の連用形に連り、この場合音便とな

終止形に連る

ることがあります。 との、で、から、が、のに、けれど、けれどもは終止形に連ります。

四、係になるもの

ほか 子供ほか居ない。 (他を排斥する意を示す)

しか 私しか知らない。 (同右)

右のやうにほか、しかが上にある場合、文の結びは打消の言ひ方となります。

五、文の終に用ひるもの

か 誰も知りませんか。 (疑問を示す)

か そんなことがどうして出来ませうか。 (反語を示す)

な そんな事をするな。 (禁止を示す)

六、文をつくるのに直接関係のないもの

よ これをしてにおいて頂戴よ。 (意味を強める)

ね 相變らずです。 (同右)
や 静子やこれをして下さい。 (呼掛を示す)

練習問題

- 一、次の文中から助詞を抜き出して、それがどんな意味をあらはしてゐるかを示しなさい。
一、下界へ行く途中におそろしい男が道をおふさいで立つて居ます。
二、それにちがひありません。どこでござらんになりましたか。
三、午前八時、私たちは学校の門を出ました。
四、五十鈴川のきれいな水で手を洗ひ、口をすゝいで御門の前に進んでをがみました。
五、午後一時から五時まで自宅にゐますから、その間に來て下さい。
六、雨が降るのに傘をもたないで行つた。
七、こんど來てくださる時まで、おちいさんの右のほゝにあることをあづかつてお

- きませう。
- 八、風が吹くと花びらのやうな雪が時々窓から部屋の中へ舞込んで來ます。
 - 九、みんながいろ／＼な事をいふが誰もまだ其の木の高さを知つてゐる者はない。
 - 一〇、昨日雨が降つたので、今日は六つも朝顔の芽が出ました。
 - 一一、此の島に向かつて北から南からかけ渡された橋ばかりでも二十もあつて、まるで中之島をたくさんの串でさし通したやうになつてゐます。
 - 一二、兄は何でも理窟で考へる方でしたが、弟は理窟よりも實際の物を作るのが得意でした。

- 二、條件を示す助詞を、その例を舉げて説明しなさい。
- 三、助詞の中、用言に添ふものゝ接續表をつくりなさい。

復習問題

- 一、次の文を品詞に分類し、活用する語についてはその種類及び活用形を

示しなさい。

一、もし國語の力によらなかつたら我々の心はどんなにばらばらになることであ

二、あ、おいたはしいお姿、とても明かるいうちに山本まではお着きになれます

三、無理が通れば道理が引込む、
日が落ちて西の空は夕ばえが一きは美しい、
垣根に咲残つた二三りのコス

四、モスの花が夕やみにかすかに浮いて見える、

五、頼朝は唐絲もゆるした上に萬壽にはたくさんのはうびを與へました、

六、特別急列車「あじあ」がすばらしい速さで走つて、新京へは八時間餘り、ハルビ

七、日本に春が來ると思へば、南洋にゐる燕はもう矢もたてもたまらず北をさして

八、時計屋さんは早速ピンセットでねぢをはさみ上げて、大事さうに元のふたガラ

九、かごを首にかけて二三人の男が器用な手つきで蜜柑を採つてゐる、

一〇、私は今落日に對して、うすら寒い秋風を浴びながら、山鳩の聲さびしきベルダン

の戦跡に立つてゐます。

二、次の文中に誤があつたら正し、その理由をいひなさい。

一、久しぶりで小學校時代の恩師に逢ふてうれしゆう御座ひました。

二、早よう持つてかえつてお母さんを喜ばせるがよぬ。

三、涼しい風に送られて琴の音がゆかしい聞れる。

四、悲しむだり喜むだり泣ひたり笑ふたりするのは浮世の常であらう。

五、あなたは今日はよぶ歸つてゐらしゃいましたね。

六、そんな眞似をしやうものならどんなに笑はれることでしょう。

七、一向勉強せよとせないがどうしたことです。

八、初めからあなたに任せうと思ふてゐました。

九、車を待たして幾度も呼んだが誰も應ぜない。

「お、爺さんの胸中には感謝の念が湧いて来る。あゝ有難いことだ。斯うして芋種を植え、大根の種を蒔いて置くと、雨が降つては土を濕してくれる。」

文章法篇

第一章 文の成分

今までは一つ一つの品詞について述べて来たのでありますが、これからは、その個々の品詞が文章を組立てる成分としてはどんな役目をもち、どんな関係で結び合はされてゐるかをしらべませう。

花が咲く。

右のやうにいくつかの單語が結び合つて、一つのまとまつた考をあらはしてゐるものが文であることは既に述べましたが、その單語の一つ一つはやはりその文に於いて、それ／＼その一成分となつてゐるものであります。但し、助動詞と助詞とは、それだけで單獨に用ひられることがなく、他の語に接續して初めて働をもつも

のでありますから、文章法に於いては、

花が咲きました。

私は女學生です。

右のがは花に、または咲きにはは私に、ですは女學生に、それく
接續したまゝ、一成分と認めるのであります。

主語と述語

梅が咲く。

匂ひがよい。

私は女學生です。

右の文は「何がどうする」「何がどんなである」「何が何である」といふ三つの形で、これが私どもの考を發表する根本の形であります。これには必ず「何が」といふ文の主體となる部分があります。これを主語といひます。そしてこの主語について、それが「どうする」

述語

「どんなである」「何である」といふ部分があります。これを述語といひます。

この主語と述語とは、文として缺く事の出来ぬ主成分であります。

修飾語

主語と述語とだけでは私共の複雑な考を十分にあらはすことが出来ない場合があります。かういふ場合には、その主成分に種々の語を附加して、それを修飾限定します。例へば、

美しい花が咲きました。

梅がきれいに咲きました。

の例に於いて、線を施した語は、——線を施した語をそれく、修飾限定してゐます。かやうな語を修飾語といひます。この中、

廣い路が遠くの村までつゞいてゐる。

有名な古事記傳は本居宣長の著である。

の線を施した語のやうに、それ／＼その下にある體言を修飾してゐるものを形容詞的修飾語といひ、

はさみの音がちよきん／＼と聞える。

この教室は大層涼しい。

彼は急いで家に歸つた。

の線を施した語のやうに、それ／＼それより下にある用言を修飾限定してゐるものを副詞的修飾語といひます。

獨立語

木の葉が落ち、さうして間もなく雪が降り出します。

静子さん、あなた行つて下さいませんか。

あゝ、あれは僕の作つた曲だ。

姉さん、これは何といふ花ですか。

京都は景色がよい。

右の傍線を施した語は、接續同格、感動呼掛提示をあらはしてをり、文の構成には直接關係がありません。かやうな語を獨立語といひます。

以上述べました主語・述語・形容詞的修飾語・副詞的修飾語・獨立語が文の成分となるすべてであります。

練習問題

一、次の文中の主語・述語を指摘しなさい。

一、春が来た。

二、私のうちに大きなぼんぼんどけいがあります。

三、ばか／＼と馬のひづめの音がして来た。

四、瀬戸内海は世界における海上の一大公園である。

五、アメリカ行の船は横濱を出て八日目にハワイのホノルルに寄港する。

三、次の文中から形容詞的修飾語と副詞的修飾語とを指摘し、その修飾せ

ちれてゐる語を示しなさい。

一、潮がすん／＼引くので舟は忽ち海へ出ました。

二、あなたの其のお心掛には全く感謝しました。

三、あなたは今朝一人で川を越した方ではありませんか。

四、空はいよく澄んで、月はいよく明るく。

五、つばめは鳥の中でも一番速く飛ぶ鳥です。

六、強い太陽の光が、山に曇にきら／＼と照りつけてゐる。

七、見渡す限り水田が續いて青々とした稲が勢よくのびてゐる。

三、次の文をその成分に解剖しなさい。

一、夕暮がしづかに訪れて来た。

二、若草山！まあそれはなんといふ優しい名でせう。

三、乙女峠には雨が降つてゐます。

四、大勢の神様はどつとお笑ひになりました。

五、澤山の子蛙は草のかげのあちらこちらをうれしさうにとびまはりました。

文の成分の正常の位置

花が咲く。

美しい花がたくさん咲いた。

彼女は早く家に歸つた。

彼女が早く家に歸つた。

第二章 文の成分の位置及びその省略

六、汽車が白い煙をはいてゐます。

七、僕のはだしで庭へ出た。

八、命は、兄神の釣針をなくした事を、くはしくお話しになりました。

九、窓の外には楓の枝がそよ風に動いてゐる。

一〇、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐる。

一一、良寛さまはほんとに、子供のお友達になり、生まれて来たやうな人でした。

右のやうに主語は上に、述語は下にあり、修飾語は被修飾語よりも前にあります。これが文の構成上普通の順序であります。又

あ、今朝はなか／＼寒い。

井上さん、よく勉強しますね。しかし身體を大切にしなさい。道子さん、あなたはよく御親切になさいますね。

右のやうに獨立語は通常、文の始めにおかれますが、その中、接續語は文又は語句の間に、同格語はそれに對する語の直ぐ上におかれます。

文の成分の倒置

咲いた、櫻が。

出た、出た、月が。

あんな人に私もなつて見たい。

この方が親友です、私の。

右のやうに特に語勢を強める爲又は文の調子を整へる爲に、文の正常の位置を變へることがあります。

文の成分の省略

(あなたは)文法をむつかしいと思ひますか。

(私は)一寸驛まで人を迎へにまゐります。

どうか(それを)私におまかせ下さい。

これが私達の學校(です)

右のやうに括弧をした部分の語を省略して用ひることがあります。これは文が冗漫になるのを避け、又は言葉の調子を強める爲であります。

練習問題

次の文に成分の省略せられたものがあつたら補ひ、その成分の倒置が

あつたら正常の位置に直しなさい。
一、どうしたのですか、そんなにうれしいのは。

二、天氣がよかつたね、昨日は。

三、それは結構いただきませう。

四、先生が、どうしてこちらへ。

五、棄狗つて何。

六、貴女のやうな境遇に私もなつて見たい。

七、とまれ、とまれ、茶の花に。

八、あの波を御覽。かはいさうだが、とても人間業では救へない。

九、何だらう、あれは。

一〇、皆が其の本を買ひましたから、私も買ひました。

第三章 句 と 節

一、連語

連語

村はづれにある雑木山を開墾した。

私のすきな運動はテニスです。

右の傍線を施した部分のやうに、主語述語、或は其の他の文の成分が數語結合して、それだけでは一つのまとまつた文ではないが、一團となつて他の語を修飾する場合があります。これを連語といひます。

二、句

花の散るのはさびしいものである。

青葉の茂つた森が見える。

汽車はひたすら人家も見えない野原を西へくと走る。

目がさめると、もう夜が明けてゐた。

私は用事が出来ましたから失禮します。

櫻の散るのは雪の降るやうである。

右の傍線を施した部分のやうに、主語・述語を具備し、それで一つのまとまつた文ではあるが、その獨立性を失つて他の文の成分となるものがあります。これを句といひます。句には右の花の散るのはのやうに主語の役目をするもの、青葉の茂つた人家も見えないのやうに、形容詞的修飾語の役目をするもの、目がさめると用事が出来ましたからのやうに副詞的修飾語の役目をするもの、雪の降るやうであるのやうに述語の役目をするものがあります。

三節

靜子は本を読み、清子は字を書く。

のやうに一つの文が他の文の成分とはならず、獨立性をもつたまま、更に大きな一つの文をつくる場合があります。この場合その各の文をそれ／＼節といひます。

練習問題

- 一、連語と句、句と節との相違を説明しなさい。
- 二、次の文中から連語句及び節を抜き出しなさい。

一、山の雪は春が来てもまだ消えない。

二、木材の中で其の用途の廣いのは杉と檜である。

三、私は花の咲く春がすきです。

四、あなたの買つて歸られた本を私も讀ませていただきます。

五、雨は降るし、風は吹く、道は眞暗闇だ。

六、私の學校にある茶室は三百年も前からあるものださうです。

七、霜の消える頃から組合の脱穀機の音があたりの靜かさを破つて景氣よく聞えてくる。

八、大ていの物は枯れて茶色になつてゐる中に梢に鈴なりの柿が赤々と照つてゐる。

九、學問が出来るとからだは弱いし身體が強いと學問が出来なく。

一〇、雪の上の楽しい晝食がすみ今度は先生に一人／＼滑り方を教へていただきます。

第四章 文の種類

(甲) 構造上の種類

文をその構造の上から分類すると次の三種類となります。

一、単文

花が咲く。

向ふの山の頂に日の光が赤々とさし始めた。

右のやうに主語と述語の関係が唯一回だけ成立してゐる文を単文といひます。従つて

櫻の花も桃の花も李の花も咲き出した。

明子さんは字も美しく書かれるし歌も上手につくられる。のやうに主語がいくつあつてもそれに對する述語が一つである場合、述語がたくさんあつてもこれに對する主語が一つである場

單文

複文

合ともに單文であります。

二、複文

風が吹けば波が立つ。

花の咲く春が来るのを待ちかねる。

花が咲き鳥の鳴く春がやつて来た。

右のやうに成分として句を持つてゐる文を複文といひます。

三、重文

花が咲き鳥が鳴く。

明子は字が上手であり、清子は畫がうまく、直子は歌が上手である。

花の咲く春は楽しく、月の澄む秋はものあはれである。

右のやうに二つ以上の節から出来てゐる文を重文といひます。

(乙) 性質上の種類

重文

文をその性質の上から分類すると次の四種類となります。
一、平叙文

ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。
夜はまだ明けません。

右のやうに事實をありのままに述べた文を平叙文といひます。
二、疑問文

まだ櫻の花は咲きませんか。
一體あなたはどういふお方でございますか。
どうしてそんなことがわかりませうか。

右のやうに疑問又は反語の意をあらはした文を疑問文といひます。

三、命令文

午前八時までには必ず登校しなさい。

これをあちらへ持つていつて下さい。
教室で勝手に話をしてはいけません。

右のやうに命令希求禁止の意をあらはす文を命令文といひます。
命令文には主語の省略せられるのが常であります。

四、感動文

あゝ、なんといふ盛大なことぞ、この大會は。
まあ、綺麗な花。

右のやうに感動の意をあらはす文を感動文といひます。感動文には文の成分が省略せられることや倒置せられることがあります。

練習問題

- 一、次の文は構造上から、又性質上からどんな種類に屬してゐますか。
一、此の大雪にどうして出かけたのか。

- 二、夏の夜は更けやすい。
- 三、親は子を愛し、子は親を敬ふ。
- 四、昨夜の風雨は名残なくをさまつたが海面にはまだ波のうねりが高い。
- 五、お目にかけたいものがあるからぜひ来て下さい。
- 六、あちらでもこちらでも驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。
- 七、かごを首にかけて二三人の男が器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。
- 八、見渡す限り果もない原野に放牧の馬がいう／＼と草をはんでゐる。
- 九、まあ、これはどうしたのですか。
- 一〇、お知らせしたい事はまだ／＼たくさんありますが、大分複雑になりますから此の位にして置きます。

總復習問題

- 一、次の文を文の成分に分けて、構造上どんな種類に屬してゐるかを示しなさい。

- 一、紙は色白く、質強く、光澤のあるのがよい。
- 二、こんなに海が荒れてゐるのに、あなた方はよく平氣で居られますね。
- 三、小さい神様だなあ。一體何といふお方だらう。
- 四、午前八時になると艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。
- 五、天井の高い、廣々とした室はしんとして靜かだ。
- 六、窓の外には風の杖がそよ風に動いてゐる。
- 七、國語を忘れた國民は國民でないときさへいはれてゐる。
- 八、日が落ちて、西の空は夕ばえが一きは美しい。垣根に咲残つた二三りんのコスモスの花が夕やみにかすかに浮いて見える。
- 九、日本に春が來ると思へば、南洋にゐる燕はもう矢もたてもたまらず北をさして進むのです。

- 一〇、私は今落日に對してうすら寒い秋風を浴びながら山鳩の聲さびしきベルダンの戦跡に立つてゐます。

- 二、右の文中の音便を抜き出してその種類を示しなさい。

動詞活用表

段 一 上		段 二 上		段 四		活用																					
(居)(見)(干)(似)(着)(射)		懲老恨亡用恥落過起		死 有 去 讀 學 揃 待 許 漕 行		語 幹																					
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	な	ら	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	か	未然形	
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	に	り	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	ぬ	る	連用形
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ぬ	る	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	ぬ	る	終止形
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ぬ	る	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	ぬ	る	連體形
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ね	れ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	ね	れ	假定形
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ね	れ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	ね	れ	命令形
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	な	ら	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	か	未然形	
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	に	り	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	ぬ	る	連用形
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ぬ	る	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	ぬ	る	終止形
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ぬ	る	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	ぬ	る	連體形
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ね	れ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	ね	れ	已然形
ゐ	み	ひ	に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ね	れ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	ね	れ	命令形

口

語

語

尾

文

語

語

尾

第二表

美	良	語幹 語尾	口
美	良	語幹 語尾	文
く	く	未然形	く
く	く	連用形	く
い	い	終止形	し
い	い	連體形	し
けれ	けれ	假定形	しけれ
○	○	命令形	○

形容詞活用表

静か	平然	涼し	語幹 語尾	口
静か	平然	涼し	語幹 語尾	文
でせ	であら	から	未然形	く
でし	であつ	かつ	連用形	く
に	と	○	副詞形	し
で	○	○	中止形	し
です	である	○	終止形	し
な	たる	○	連體形	し
なら	○	○	假定形	しけれ
○	○	○	命令形	○

形容動詞活用表

サ行變格 (爲)	カ行變格 (來)	段	一	下	段	一	上	段	ナ行變格	ラ行變格			
し	こ	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
し	き	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
する	くる	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
する	くる	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
すれ	くれ	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
しせ	こい	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
サ行變格 (爲)	カ行變格 (來)	下一段	段	二	下	段	一	上	段	二	上	ナ行變格	ラ行變格
せ	こ	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
し	き	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
す	く	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
する	くる	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
すれ	くれ	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	
せよ	こよ	わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ	た	が	か	

助動詞活用表

時				敬	崇	役	使	能可	身受	種類						
行進在存	了完	去過	來未													
てある	た	た	う	致す	申す	ます	遊ばす	下さる	なさる	になる	られる	される	せ	れる	られる	本形
てある	たら	たら	ー	致さ	申さ	ませ	遊ばさ	下さら	なさら	になら	られ	され	せ	れ	られ	未然形
てあり	たり	たり	ー	致し	申し	まし	遊ばし	下さり	なさり	になり	られ	され	せ	れ	られ	連用形
てある	た	た	う	致す	申す	ます	遊ばす	下さる	なさる	になる	られる	される	せ	れる	られる	終止形
てある	た	た	ー	致す	申し	ます	遊ばす	下さる	なさる	になる	られる	される	せ	れる	られる	連體形
てあれ	たら	たら	ー	致せ	申せ	ませ	遊ばせ	下され	なされ	になれ	られ	され	せ	れ	られ	假定形
てよ	ー	ー	ー	致せ	申せ	ませ	遊ばせ	下さ	なさい	ー	ー	ー	せよ	れよ	ー	命令形
つね	たり	けり	む(ん)	候	仕る	侍る	奉る	給ふ	しむ	さす	する	しむ	さす	する	する	本形
て	たら	(けら)	ー	候は	仕ら	侍ら	奉ら	給は	しめ	させ	せられ	しめ	させ	せられ	られ	未然形
て	たり	(けり)	ー	候ひ	仕り	侍り	奉り	給ひ	しめ	させ	せられ	しめ	させ	せられ	られ	連用形
つね	たり	けり	む(ん)	候(ふ)	仕る	侍り	奉る	給ふ	しむ	さす	する	しむ	さす	する	する	終止形
つね	たる	ける	む(ん)	候ふ	仕る	侍る	奉る	給ふ	しむ	さす	する	しむ	さす	する	する	連體形
つね	たれ	しか	め	候へ	仕れ	侍れ	奉れ	給へ	しむれ	さすれ	するれ	しむれ	さすれ	するれ	するれ	已然形
てよ	ー	ー	ー	候へ	仕れ	侍れ	奉れ	給へ	しめよ	させよ	せよ	しめよ	させよ	せよ	れよ	命令形

口語 文語

助動詞活用表

種類	身受	能可	役使	敬 崇				時				推 量	打 消	指 定	希 望	歎 詠	比 況
				れる	られる	せる	させる	了 完	去 過	來 未	行 進 在 存						
口	本形	れる	られる	せる	させる	よう	た	た	よう	てある	うらしい	ぬ	ない	です	たい	やうである	やうです
口	未然形	れ	られ	せ	させ		たら	たら		てあら	らしく	ザ	なく	でせ	たから	やうであら	やうでせ
口	連用形	れ	られ	せ	させ		たり	たり		てあり	らしく	ザ	なく	でし	たがり	やうであり	やうでし
口	終止形	れる	られる	せる	させる	よう	た	た	よう	てある	うらしい	ぬ(ん)	ない	です	たい	やうである	やうです
口	連體形	れる	られる	せる	させる		た	た		てある	らしい	ぬ(ん)	ない		たがる		やうな
語	假定形	れゝ	られゝ	せれ	させれ		たら	たら		てあれ		ね	なけれ		たけれ		やうなら
語	命令形	れよ	られよ	せよ	させよ					てあよ							
文	本形	る	らる	す	さす	む(ん)	たり	けり	む(ん)	つぬ	らむ	す	ざり	なり	たり	けり	ごとし
文	未然形	れ	られ	せ	させ		(ら)たら	(けら)		て	らしく	ザ	ざら	なら	たら		ごとく
文	連用形	れ	られ	せ	させ		(り)たり	(けり)		て	らしく	ザ	ざり	なり	たり		ごとく
文	終止形	る	らる	す	さす	む(ん)	たり	けり	む(ん)	つぬ	らむ	す	ざり	なり	たり	けり	ごとし
文	連體形	るゝ	らるゝ	する	さする	む(ん)	る	ける	む(ん)	つる	らむ	ぬ	ざる	なる	たる	ける	ごとき
語	已然形	るれ	らるれ	すれ	さすれ	め	(れ)たれ	しか	め	つれ	らめ	ね	ざれ	なれ	たれ	なれ	
語	命令形	れよ	られよ	せよ	させよ					てよ				なれ	たれ		

動詞・助動詞接続法

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	體言
れる(四) られる(上、下) せる(四) させる(上、下) う(四) よう(上、下) ぬ(サ變に異例) ない(サ變に異例) まい(四段以外)	下さる 遊ばす になる なさる 申す 申す 致す たい たがる (たかつ)	らしい であらう でせう だらう まい(四)	だ		です である だ
未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	體言
る(四、サ變、カ變) らる(上、下、上、下) す(四、サ變、カ變) さす しむ む り(サ變) まし す ざり じ まほし	給ふ 奉る 侍り 候 つ ぬ たり き たり けり(完了) けり(サ變、カ變に異例) なり(詠歌) なり(詠歌)	らむ らし べし べかり まじ めり まじ	なり (指定)	り(四)	なり (指定) たり (指定)

助詞と用言との接続法

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	體言
て ながら ても	ながら ても	とも の から の に が	(と) (とも)	ば	が の の を へ より から
未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	體言
ば で なむ	つ、 ながら なむ (カ變には未然形)	とも と も	ば とも	ば	が の に を か な や と へ

日三十二月二十年二十和昭
濟定檢省部文

用科語國校學女等高
用科語國校學業實

昭和十二年七月廿三日印
昭和十二年七月廿八日發
昭和十二年十二月五日訂正
昭和十二年十二月十日再版發行



製復許不

發行所

京都市上京區丸太町堀川西入

星野書店

電話西陣三〇三五・四八三七・六〇九八番
振替貯金口座大阪四九四九一番

著者 吉澤義則

印發者兼 星野敬一

京都市上京區丸太町堀川西入
西丸太町一七一

女子新國文典 初學年用

定價四十五錢

〔刷印部刷印店書野星〕

第一學年 熊本ハツ工

森森木



皇學書局

広島大学図書

2000073169

